特集

「はぐくむ」

―未来を紡（つむ）ぐ地域の力―

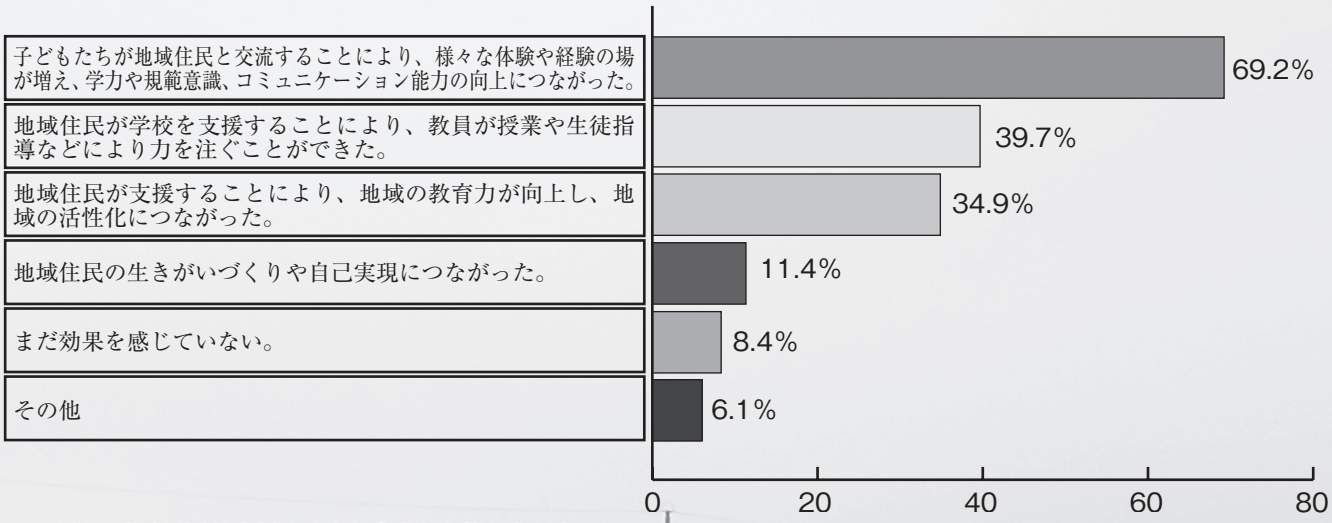
平成20年3月、文部科学省はそれまでの学習指導要領を改訂しました。この新しい学習指導要領は、小学校は平成23年4月から、中学校は平成24年4月から、高等学校は平成25年の入学生から、全ての教科で実施されます。

新しい学習指導要領では、子どもたちの現状をふまえ、これまでの学習指導要領にならい「生きる力」をはぐくむという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視しています。

その内容として、まず学校で学ぶ内容の充実と授業時間の増加があげられます。外国語教育や理数教育、道徳教育、体験活動、伝統や文化に関する教育が充実します。また、授業時間の増加については、つまずきやすい内容を確実に習得するための繰り返し学習や知識・技能を活用する学習の充実が図られます。

このように、学校で学ぶ内容が充実しますが、これは「ゆとり」か「詰め込み」かという教育ではなく、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力などの育成の両方を大切ととらえ、それぞれの力をバランスよく伸ばしていくこと

学校支援地域本部事業に取り組んだことによる効果（複数回答）



※平成 21 年度「学校支援地域本部事業」実態調査研究より

調査対象：文部科学省が実施する学校支援地域本部事業におけるすべての本部につき各１校

※学校支援地域本部とは、学校・家庭・地域が一体となって地域ぐるみで子どもを育てる体制を整えることを目的に文部科学省が全国の市町村に設置を推奨した取組です。

川角小学校「田植え体験」

に主眼を置いた内容なのです。

また、新しい学習指導要領では、「生きる力」をはぐくむためには、学校だけでなく、家庭や地域といった社会全体で子どもたちの教育に取り組むことが大切であるとうたっています。

家庭においては、子どもに基本的な生活習慣を身につけさせるとともに、自立心を育成し、心身に調和のとれた発達を図ることを期待しています。

そして、地域においては、様ざまな立場の人がボランティアとして教育活動を支援することで、子どもたちが豊かな心や健（すこ）やかな体の育成など様ざまな力を身につけることを期待しています。平成21年度に文部科学省が行った「学校支援地域本部事業」実態調査研究（上のグラフを参照）によると、子どもたちが地域住民と交流することで学力や規範意識、コミュニケーション能力が向上したという回答が、実に70パーセント近くもありました。

そこで、今回の特集では、毛呂山町における地域の人たちによる様ざまな取組を紹介することで「地域の力」を考えたいと思います。

毛呂山町子ども会育成会連絡協議会主催「第２回海の子体験クラブ」

Chapter 01

育てる

他校の子どもたちとのふれあい
地域の人たちとのコミュニケーション
それは学校では味うことのできない
貴重な楽しさ

子ども会

子どもたちが生活する最も身近なコミュニティが、それぞれの住む地域であり自治会です。現在、毛呂山町には、35の地区に子ども会があります。

本来、子ども会活動とは、遊びをとおして年齢の違った子どもたちが一緒に活動することによって仲間を作り、一定のルールのなかで様ざまなことを学び、成長していくことを助けるためにあります。

しかし近年、少子化が全国的に進み大きな問題となっています。毛呂山町も例外ではなく、この5年をみても、およそ80人も子どもの数が減少しています。

昔は、夏休みともなると屋外で元気よく遊びまわる子どもたちをよく見かけましたが、最近では少なくなっているように思えます。これは、少子化や屋外で遊ぶ子どもの数が減ってしまっただけでなく、子どもたちの遊ぶ場所が限られてしまったことや、屋外で遊ぶ方法がわからない子どもが増えていることも原因と考えられます。しかし、子どもはこの時期、様ざまなものを見て、聞いて、触って、実際に行ってみて学ぶことも多いのです。

その様ななか、子ども会では各自治会と連携して、子どもたちに遊び方や機会を提供し、少しでも子どもたちが安全に楽しく遊ぶことができるような取組をしています。例えば現在、地域で行われている「ふれあい・いきいきサロン」においても地域の役員と子ども会とが綿密な話し合いをし、一人でも多くの子どもが参加できるように運営している地区も多くみられます。子どもたちにとっては、いつも遊ぶ相手と違った子どもと遊んだり、自分より年の離れた人と接することでコミュニケーション能力や社会性を養うことのできる場にもなっています。

子ども会は、地域に住む子どもたちが、地域の人たちとも接することのできる場です。自治会と連携して様ざまな催しを企画することで、子どもたちは、同年代の子どもたちだけでなく、近所の大人たちとも接し、たくさんのことを学んでいます。

「町民レクリエーション大会」
子ども会リレー

毛呂山町子ども会育成会連絡協議会

毛呂山町子ども会育成会連絡協議会（以下「毛呂子連（もろこれん）」）は、町内全体の子どもたちの健全な育成を目的

に活動を行っています。

毛呂子連は、町内全体をひとつの大きな地域と捉え、子どもたちに様ざまな体験をしてもらおうと活動しています。小学生には、他の学校の子どもたちと遊ぶことで、遊び仲間の輪を広げ、さらに大人と接することで、社会の規範などを学ぶための場を提供しています。また、中学生や高校生には、ジュニアリーダー育成活動をとおして、次代の子どもたちを育成するための資質を養ってもらうために力を注いでいます。

毛呂子連では、夏のソフトボール・ティーボール大会や海の子体験クラブ、冬に行われる彩の国21世紀郷土かるた毛呂山町大会などを主催するだけでなく、子どもたちのニーズを捉え、ひとりでも多くの子どもがより多くの体験をできるように、今後も様ざまな事業を展開していく予定です。

「子ども会ソフトボール・ティーボール大会」

Topics 毛呂山町青少年相談員協議会

毛呂山町青少年相談員協議会は、別名「お兄さん、お姉さん活動」とも呼ばれている。町内に在住・在勤の32歳以下の若者が、主に小学生を対象に、様ざまな遊びを提供するだけでなく、子どもたちと一緒に遊ぶ活動をしている。

年間をとおしての主な活動としては、春のサイクリング、夏のキャンプ、秋のヤングフェスティバル、冬のドッジボール大会などがある。その他にも遊び会など不定期の行事も行っている。子どもたちと楽しく遊ぶことをとおして、相談員自らも子どもたちとともに成長することができる活動ともいえる。

「もろっこキャンプ 2011」

子どもたちにもっと体験を！

現在、町内にある子ども会のうち毛呂子連に加入しているのは13団体と年々減ってきている現状にあります。毛呂子連の活動の大きな目的は、町内の子どもの健全育成を図ることにありますが、加入団体の減少が多少なりとも活動に影響している面があります。

私たち毛呂子連の活動は、子どもたちにたくさんの体験の場を提供する活動であると認識しています。地区という範囲にとらわれず、町全体の子どもたちに等しく体験の場を提供することを考え活動しています。

子どもたちは、可能性で満ち溢れており、様ざまなことを体験することで、吸収し、成長していきます。それは、勉強やスポーツ、遊びだけでなく体験する全てのことから様ざまなことを学び、社会性を培っていきます。例えば、「海の子体験クラブ」は、海のない埼玉県に暮らしている子どもたちに海のすばらしさを体験してもらおうということで始まったプログラムですが、参加した子どもたちは、僅か2泊3日で、海で遊ぶことやそこで暮らす人の生活を実際に見ることなどをとおして、実に様ざまなことを学んで帰っていきます。「帰ってきてから、生活習慣がしっかりしてきた」と親御さんから声をかけていただいたこともありました。

子どもたちの未来に対する可能性は無限です。その可能性を引き出してあげるためには、子ども同士の遊びや地域の大人と接することなど様ざまな体験が不可欠です。その手助けをしていくのが私たち毛呂子連の努めです。子どもたちの健やかな成長のためにも、もっと多くの団体に毛呂子連に加入をしてもらいたいと思っています。

毛呂山町子ども会育成会連絡協議会
霜﨑　徳裕　会長

Chapter 02

教える

一人ひとりの理解度に合わせて段階を踏んで学ぶ 教える側と教わる側の信頼関係が「わかる」を生み出す

川角中学校サマーセミナー「英検コース」

学力向上毛呂山プラン

子どもたちが成長する過程で必要不可欠な要素が「学び」です。

毛呂山町では、子どもたちの「学び」を助けるため、『学力向上毛呂山プラン』を策定し、子どもたちが確かな学力を身につけ、自分自身の進路を自由に選択していくことができるように、学習のつまづきを排除し、基礎学力の水準を高めるための取組を行っています。

どのように丹念に授業を行っても、子どもたちの間に学力の差が生じることは避けることができません。問題はそれをどのように縮め、全ての子どもたちが次の課題にスムーズに進めるようにするかということです。そのための具体的な取組として、次の4つの取組を組織的に実践しています。

①支援員の活用

児童生徒支援員が生徒指導の補助にあたり、授業規律の確立に努めており、学力向上支援員が補充学習や少人数指導を行い、きめ細やかな指導を行っています。

②授業研究会

児童・生徒の学力を向上するための授業の工夫・改善に重点を置き研修を行っています。

「英検コース」では丁寧な個別指導も

③基礎学力重点指導

朝の会や授業の始めの5分間などを利用して、読み・書き・計算に焦点を当てた学習を行います。短時間の反復学習を毎日行うことで、学習内容の定着を図ることができます。

④補充授業の充実

その子が不得手とするところを重点的に補うことで、つまづく箇所を丹念につぶしていきます。一人ひとりの学習状況に応じて行うため、何年も前の単元に遡り指導することができます。

学力向上支援員

『学力向上毛呂山プラン』のなかで、子どもたちの学力向上の要となる取組が学力向上支援員です。学力向上支援員は平成13年に導入された町独自の事業で、現在、小学校各校に2人、中学校各校に3人配置されています。

支援員の仕事は多岐にわたっています。授業中は教室内を回りながら、集中力の途切れた子に声をかけて励ましたり、内容がわからず手が止まっている子の理解を手助けしたりします。また、少人数指導の教室も受け持ち、一人ひとりの習熟度に

合わせた授業を行っています。段階を踏んで丁寧に教えることで、児童・生徒がそれまでわからなかった課題を克服し、次の課題へと取り組んでいけるようにしています。そして長期休業期間前後の取組として、小学校では、夏休み前に「学力向上教室」を行い、学んだことを総ざらいしています。わからないところを残さず、長期休業期間中の家庭学習や休み明けの授業にスムーズに取り組めるようにしています。また中学校では、夏休み明け前に「サマーセミナー」を開設し、事前に申し込んだ生徒に対し、英検のための英語講座や自らの弱点を克服するための学力向上講座を行っています。

このように、学力向上支援員は、子どもたちの「学び」を助けるだけでなく、子どもたちを育てる取組のなかでも重要な役割を担っている取組のひとつといえます。

川角小学校「少人数指導」

Topics 地域雇用創造ＩＣＴ絆（きずな）プロジェクト

このプロジェクトは、地域の雇用促進を目的に総務省より提言されたもので、毛呂山町では、子どもをもつ町内の主婦を授業の補助を行うＩＣＴ支援員として雇用し、毛呂山小学校と川角小学校にｉＰａｄと電子黒板を配置して授業を行っている。ｉＰａｄは、両校の３学年（毛呂山小4・5・6年、川角小2・3・5年）の児童１人に１台割り当てられ、九九や漢字の練習、インターネットに接続しての調べ学習などを行っている。児童は、手元のｉＰａｄと電子黒板で視覚を使いながら、様ざまな問題を楽しく解くことができる。

川角小学校でのｉＰａｄを使った授業

子どもたちの将来を描きながら―

私は、以前航空関係の仕事をし、主に管制官や部下の教育に携（たずさ）わっていました。英語の教員免許は、そのときに取得をしたのですが、今になって役立つとは思ってもいませんでした。仕事でも教育に携わっていたせいか、退職後には、自分が住む地域の若い人に対する教育に携わりたいという願望がありました。そのような理由で、学力向上支援員に応募し、本年４月から川角中学校に勤めさせていただいています。

学力向上支援員として勤務をして感じたこととして、まず中学生という時期は、実に多感な時期であるとともに溢（あふ）れんばかりのエネルギーをもっているということです。授業に対して、真面目に取り組む子や集中して授業を受けられない子など、実に様ざまな生徒がいます。しかし、問題が解けたときや分かったとき、ものすごく意欲があがり、何に対しても積極的になります。

勉強することは、高校受験のためだけではなく、その先の未来を生きていくための材料であるといえます。大人になって幸せな人生を歩めるかどうかは、この時期の学習によって大きく変わってきます。そのために一人ひとりの将来を描きながら、なるべく考えることに重点をおいた授業をしていきたいと考え、日々取り組んでいます。

子どもたちは、地域のみならず日本の宝といえます。そのためにも私たち大人は、教育によって蒔（ま）かれた種がどのように芽吹き、花をつけるかを考えながら教えていかなければならないのです。

また、地域にはまだまだ、意欲や能力があるのに一歩踏み出せないでいる人たちがたくさんいると思います。そのような人がもっと積極的に教育の場にも参画（さんかく）できるようになれば、更によい相乗効果が生まれるものと思います。

川角中学校学力向上支援員
渡邉　二男（ふたお）　先生

Chapter 03

魅せる

「体験」それは何ものにもかえがたい
貴重な経験
子どもたちは「体験」を繰り返すことで
様ざまなことを学んでいく

中学生体験講座

『学力向上毛呂山プラン』は、「確かな学力の向上」という主に「知」の側面において、子どもたちの成長を支えるための取組といえます。

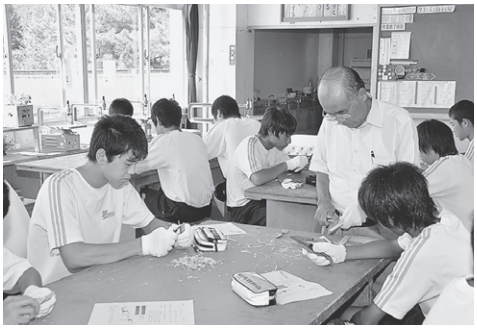
そして、知識の習得以外で、子どもたちの成長にとって欠かすことのできないもう一つの要素が、「体験」といえます。その「体験」をするために大きな役割を果たしているのが、小・中学校をとおして行われる体験学習です。体験学習は、中学校においては地域の社会人を招き、話を聞くことで学ぶゲストティーチャーや職業体験、保育実習、体験講座などが行われています。

特に体験講座は、生徒たちの多様な興味・関心に応じた講座を学ぶことができ、普段の学校生活ではできない体験を味わえるため、たいへん好評な事業の一つです。

体験講座は、毛呂山中学校で、2年生を対象に生け花や水引き工芸、手品、映像制作など、9の講座が開かれ、川角中学校で、全学年を対象に空手やダンス、そば作り、ヨガ、太鼓など、17の講座が開かれ、それぞれの分野に精通している地域の人たちが主に講師となっています。

体験学習が生徒たちに大きな影響を与える理由の一つとして、多種多様な専門家から学ぶことができる点が挙げられます。今まで知らなかった世界を、その分野の専門家から、直接見せてもらえるため、その楽しさや難しさをより深く理解することができます。多くの「本物」に触れることで、生徒たちの世界は広がっていきます。授業とは異なる体験をとおして、自分の興味や才能に気付くことができるのです。

「できる」という体験は、勉強以外でも味わうことができます。勉強がつまらないと思っていた生徒も、新たな体験をとおして、知ることや学ぶことが楽しいと感じることができるようになります。このような体験を通じて、生徒たちは「生きること」や「学ぶこと」の意味を考えるようになっていきます。このように体験講座は、社会とのつながりをとおして学習への動機づけを高める契機（けいき）となる事業であるといえます。


創作竹とんぼ講座（毛呂山中）

着付け講座（毛呂山中）

水引き工芸講座（毛呂山中）

茶道講座（毛呂山中）

Topics 社会体験チャレンジ事業

この社会体験チャレンジ事業は、体験講座とは違い中学生が、地域のなかで様ざまな社会体験活動や多くの人びととのふれあいをとおして、みずみずしい感性や社会性、自立心などを養い、豊かに生きる力をはぐくむことを目的に行われている。

この事業の対象は、中学1年生で、毛呂山中学校、川角中学校の生徒たちが、町内にある様ざまな事業所に出向き、3日間仕事を体験する。事業に参加した中学生は、この体験をとおして、働くことの厳しさや楽しさだけでなく、親への感謝の気持ちも養われるといわれる。

小学校での毛呂山中学校生徒の社会体験

川角中学校体験講座
①フラワーアレンジメント、②ヒップホップダンス、③空手道、④科学実験、⑤ダブルダッチ、⑥和太鼓

体験は、人生に幅をもたせます

昨年から、毛呂山中学校の体験講座で茶道講座を担当しています。茶道は、本来長く学んで身につけることが多いものですから、およそ2時間という短い時間に、どのように教えようかと不安もありました。そこで、お茶の飲み方やお菓子の食べ方、お茶室の雰囲気を感じていただき、茶道そのものの雰囲気を味わっていただけるように工夫をして、講座を行っています。

茶道とは、「茶室においては、和を重んじる」といった言葉に表されているように、相手の気持ちをおもんばかることがなにより大切なことです。この気持ちは今の時代に一番必要な精神であると私は思います。友達との間、家族の間で「ありがとう」という気持ちをもって、相手に接することがとても大切なことだということを学んでもらえれば、とても嬉(うれ)しく思います。

このような体験講座は、子どもの時期、特に中学生にとってはとても有意義な時間であると思います。将来このような体験をしたことが、きっと何かの役に立つときがあると思えるからです。体験することは、人生に幅をもたせます。時間に余裕があるときには、色いろなことに興味をもち、知ろうとする意欲が必要だと思います。

私は、中学生というとても大切な時期に、このような体験学習に携(たずさ)わることができて、幸せに感じています。生徒さんたちには、今後も色いろなことに興味をもってもらい、そのなかから自分に合う何かを早いうちに見つけてもらいたいと思います。そのような何かが見つかれば、今後人生を生きていくなかで、苦労や困難に直面したとき我慢(がまん)ができるようになりますし、何より努力ができるようになるからです。

毛呂山中学校茶道講座講師
渡辺　宗俊(そうしゅん)　さん

泉野小学校「稲刈り体験」

Chapter 04

支える

地域の人たちの見守り
その温かいまなざしに見守られ
子どもたちはすくすくと
安心して成長する

小学生体験学習

小学校における、中学生の体験講座に該当するのが、学年ごとに行われる体験学習です。各小学校では、それぞれの学年で、どのような体験をすることが、子どもたちの成長により効果をもたらすかを考え、様ざまな取組が行われています。その内容は、町内探検隊や作物の栽培、稲作体験、芸術鑑賞、特別支援学校との交流など多岐にわたっています。

そのうちの稲作体験は、現在、川角小学校と泉野小学校で行われています。稲作体験では、まず、子どもたちは真っ黒になって田植えをします。普段ならば「汚してはいけない」といわれるところを、泥だらけになって田んぼのなかを転げまわり、収穫のときには、皆で力を合わせて稲刈りをし、最後にその米を味わいます。お店で何でも買える時代に、「食べ物を大切に」といってもなかなか伝わらないことが多いものです。それが実際に稲作を体験することで、子どもたちは自分の頭で多くのことを考えるようになります。食べ物が自分たちの手に届くまでに、誰かが育ててくれていること、それがどんなに大変かということ、農作物は天候に影響されること、採れた米を調理してくれる人がいること…。

このような体験は、子どもたちの感性を磨き、考える力を養います。そして、その支えとなっているのが地域の人たちの力なのです。子どもたちは地域の人たちに支えられ、見守られるなか成長していくのです。

学校応援団

体験学習などの学習支援以外に

子どものころの色いろな体験は、きっと将来に生きてくる

田植え・稲刈り体験指導
安川　静男　さん

泉野小学校で、田植え・稲刈りの指導をして、もう20年以上になります。稲の管理は大変ですが、子どもたちに喜んでもらおうと思い、続けてきました。近年では、水を張った田んぼでの綱引きやリレーなどを行い、子どもたちだけでなく、お手伝いをしてくれる親御さんにも楽しんでもらっています。

今は、農業に携わる人も減ってしまい、田んぼに入る体験ができるのもこのような時だけになってしまった人も多いと思います。しかし、子どものころの色いろな体験は、きっと将来に生きてきます。ゆくゆくは、町内の全員の子どもが体験できるといいと思います。子どもたちには、田植えや稲刈りの体験で、米を作る苦労や収穫の喜びを学んでもらい、食べ物を大切にする心を養ってもらえたら、とても嬉しく思います。

Topics 放課後子ども教室

放課後や週末に社会教育施設など子どもたちの安全・安心な活動拠点を設け、地域の人の協力で、子どもたちとともに勉強やスポーツ・文化活動、地域住民との交流活動などの取組を実施している。放課後子ども教室は、子どもたちが地域社会のなかで、健やかに育まれる環境づくりを推進することを目的にしている。

月4回程度、土曜日の午前10時から午後3時まで東公民館で活動している「子ども教室」と月3回程度、木曜日の午後3時から5時30分まで図書館で活動している「木曜のあそびクラブ」がある。

「木曜のあそびクラブ」でのスライム作り

毛呂山小学校学校応援団による「すくすくタイム」

も、以前から町の教育現場には多くの人たちがボランティアとして携わっていました。例えば、登下校の見守りやスクールガードなどによるパトロール、子どもを守る家、環境を整備するための植込みの剪定、除草作業、ペンキ塗り、小破修理などです。

現在、こうした家庭や地域のボランティア活動を「学校応援団」として一つにまとめる試みが進められています。PTAや保護者による学校支援も含め、志のあるすべての人の力を組織化し、学校を中心に多種多様な活動を広げていく。さらにコーディネーターと呼ばれる調整役が地域と学校を結び、地域ごとに学校を応援するという大きな力を創り出そうとしています。

「学校応援団」は、地域が一体となって子どもの育成に取り組むことをその目的にしていますが、この取組に携わるきっかけは、決して難しいものではないのです。朝の「おはよう」、下校時の「お帰りなさい」の挨拶をすることで、子どもたちは地域から見守られているという安心感を覚え、次第に元気に挨拶ができるようになり、お礼を言えるようになっていくのです。地域に住む誰しもが関わることができる子どもたちを支える運動といえるのです。

光山小学校学校応援団による「読み聞かせ」

地域の大人と接することは子どもたちにとって大切なこと

私が所属する「毛呂山ランナーズ」では、昨年の9月から毎週水・金曜日に毛呂山小学校のすくすくタイムで子どもたちと一緒に走っています。朝の15分程度という短い時間なのですが、一緒に走ることで、子どもたちから元気をもらっています。

この時期の子どもたちの成長は、目覚しいもので、少しの時間でも続けることで、みるみる体力が上がっていくのがわかります。私たちが育ったころとは、時代が大きく変わりましたが、いつの時代も子どもたちは、明るく元気いっぱいであることが分かり嬉しく思いました。

成長の過程である子どもたちは、大人と接することで、挨拶をすることなど社会性が身につきます。地域のおじさんやおばさんと接することは、子どもたちが成長するうえでとても大切なことだと思います。

学校応援団
宮﨑　實　さん

Chapter 05

信じる

子どもたちの健やかな成長は子どもたち自身の将来へそして町の未来へと繋がる子どもたちの成長は未来への希望の礎

「生きる力」とは、知・徳・体のバランスのとれた力であると位置づけられています。すなわち知とは確かな学力の習得のこと。徳とは豊かな人間性の育成のこと。体とは健康の増進や体力の向上のことです。このような「生きる力」を育むための教育は、学校だけで行われるものではなく、学校を含めた地域全体で取り組む必要があります。子どもたちの教育には、家庭や地域の教育力と学校教育の効果的な連携が必要不可欠なのです。

しかし現在、親や友達、近所の人たちとふれあう機会が少なくなり、家庭や地域における子どもたちの居場所や心のよりどころが減りつつあります。何より教育の基本は家庭です。家庭において子どもたちは、基本的な生活習慣・生活能力の習得、健康な心身、善悪の基本となる倫理観、道徳心、自立心、自制心など社会で生活していくうえで必要なマナーを身につけます。そして家庭は、社会の最小単位であり、地域社会の基盤になるものです。かつては家庭や地域で子どもたちを支えてきたように、地域の教育力は、家庭の教育力を支え、相互に影響しあう関係にあるといえます。

また、子どもたちが地域の大人や異年齢の子どもたちと関わる機会の減少により、様ざまな体験や交流をとおして自己を成長させていく環境も少なくなっています。しかし毛呂山町では、子ども会活動で地域の大人や異年齢の子どもたちと関わる経験ができます。学校応援団には様ざまな場所で子どもたちの成長を見守っていただいています。今、多くの人たちが地域における教育に関心を持ちつつあるのです。子どもたちにとって地域の人たちとの交流は、人間関係や集団のルール、社会性、自他の尊重、公共心、規範意識などの育成に大きく影響を及ぼします。

子どもたちが学校だけでなく、様ざまな場所で学び、それを見守り、支える大人がいる環境こそが、今の時代に求められる教育の一つの形であると思います。これからの教育には、学校・家庭・地域がお互いに補完し合いながら、それぞれの力で子どもたちを支えることが必要です。それぞれが置かれた環境で子どもたちに真摯に向き合うことは、子どもたちが、健やかに逞しく成長するための手助けになります。その取組が他の誰でもない子どもたち自身の未来に繋がるものであると信じています。

毛呂山町教育委員会
髙沢　佳弘　学校教育課長

かつて日本に存在した村落共同体は農村の都市化によって失われ、人間関係の希薄化、地域社会の弱体化が問題となっています。

今回、取り上げた取組は、地域に住む人たちが、自らのできることをとおして、子どもたちの成長に寄与しようする取組といえます。そのうち体験学習や学校応援団は、学校を要として、もう一度地域を再生しようという取組でもあります。皆で知恵を出し合い、話し合い、一緒に汗を流しながら様ざまな活動に取り組むこと。言い換えれば、「地域に住む子どもたちをどう育てていくのか」という共通の課題、目標のもとに、地域の人間関係を結びつけ、失われつつある地域の絆を再構築しようとする試みであるともいえます。

それは、たとえば、近所のおじさん、おばさんが学校へ行く途中に声をかけたり、自分の子どもではないのに、学校の運動会に応援に来てくれるような、小さなかかわりをも含んでいます。「地域の子どもたちを地域の人たちが育てる」という気持ちを核として、人と人とのつながりや信頼感、郷土愛によって子どもたちを育てていくことが、本来の意味での地域教育の力なのではないでしょうか。

様ざまな問題が山積している現代社会において、これからを生きる子どもたちが健やかに成長していくためには、このような地域の力が必要です。それは、地域の誰しもが携わることのできる未来を「はぐくむ」希望の力なのです。

登校時見守り活動（光山小学校）

特集「はぐくむ」
― 未来を紡ぐ地域の力 ― おわり